

## お菓子の大舞踏会

夢野久作

五郎君はお菓子が好きでしようがありませんでした。御飯も何もたべずにお菓子ばかりたべているので、お父様やお母様は大層心配をして、どうかしてお菓子を食べさせぬようにしたいというので、ある日、家中にお菓子を一つも無いようにして、砂糖までもどこかへ隠して、いくら五郎さんが泣いてもお菓子を遣らない事にしました。

五郎さんは死ぬ程泣いてお菓子を欲しがりましたが、お父様もお母様も只お叱りになるばかり……とうとう五郎さんはすっかり怒って、御飯もたべずに寝てしまいました。

あくる日、学校はお休みでしたが、五郎さんは矢張り怒って、朝御飯になっても起きずに寝ておりました。

お父様もお母様も懲(こら)しめのためにわざと御飯を片づけてしまつて、お父様はどこかへ御用足しにお出かけになり、お母さんも一寸買物にお出かけになりました。

あとにたった一人、五郎さんは、

「ああお腹が空いた。お菓子が欲しいなあ」

と思ひながら、涙をこぼしてジッと寝ておりました。

すると玄関の方で、

「郵便……」

と大きな声がして、何かドタリと投げ出される音がしました。五郎さんは思わず大きな声で、

「ハイ」

と言って飛び起きて駆け出しますと、それは四角い油紙で、何だかお菓子箱のようです。しかもその表には「五郎殿へ」と書いて、裏には兄さん夫婦の名前が書いてありました。

五郎さんは夢中になつて硯(すずり)箱の抽出(ひきだし)から印(いん)を出して、郵便屋さんを押してもらつて、小包を受け取りました。鼻を当て嗅いでみると、中から甘い甘いにおいがしました。

五郎さんはもう夢中になつて、鋏を持って来て小包を切り開いて見ると、それは思った通りお菓子で、しかも西洋のでした。……ドロップ、ミンツ、キャラメル、チョコレート、ウエファース、ワッフル、ドーナツ、スポンジ、ローリング、ボンボン、そのほかいろいろ、ある事ある事……。

それから食べたにもたべたにも、一箱ペロリと食べてしまった五郎さんは、空箱と包み紙や紐を裏の掃きだめに棄てに行つて、帰りがけに台所へ行つてお茶をガブガブ飲むと、そのまま何喰わぬ顔で蒲団にもぐり込んでしまいました。

「アラ、五郎さんはまだ寝ているよ。何て強情な児でしょう。よしよし、今にきつとお腹が空いておきて来るだろうから」

とお母様は独り言を云って、台所の方へお出でになりました。五郎さんはおかしくて堪らず、蒲団の中でクスクス笑いましたが、そのうちにうとうと睡ってしまいました。

するとやがて何だか恐ろしく苦しくなってきましたので、どうしたのかと眼を開いて見ますと、いつ日が暮れたのか、あたりは真暗になっていて何も見えません。そのうちに前食べたお菓子連中が、めいめい赤や青や紫や黄色や又は金銀の着物を着て、男や女の役者姿になって大勢居並んでいるのがはつきりと見えました。

「こんなに大勢、一時にお菓子たちがお腹の中で揃った事は無いわねえ」

とお嬢さん姿のキヤラメルが云いました。

「そうだ、そうだ。それに五郎さんの胃袋は大変に大きいから愉快だ」

と道化役者のドロップが云いました。黒ん坊のチョコレートは立ち上って、

「一つお祝いにダンスをやろうではないか」

と云うと、ウエファース嬢が、

「それがいい、それがいい」

「万歳万歳、賛成賛成」

と皆が総立ちになって手を挙げました。するとたちまち五郎さんのお腹がキリキリと痛くなりましたので、思わず、

「苦しい苦しい」

と叫びました。

「あれ、苦しいと言ってるよ」

とドロップ嬢が心配そうに云いますと、兎の姿をしたワツフルが笑って、

「アハハハハ、自分が悪いのだから仕方がない。まあ暫く辛抱してもらうさ。さあさあ、踊ったり踊ったり」

と云ううちに、もう踊り初めました。

ボンボンが太鼓をたたく。ローリングがピアノを弾く。ウエファース嬢が歌い出す。それにつれて五色の着物を着た小人のミンツ達を先に立てて、キヤラメル嬢をまん中にワツフルの兎、ドロップの道化役者、チョコレートの黒ん坊、ドーナツの大男、そのほかいろいろのお菓子達が行列を立てて行くあとから、スポンジ嬢が手鼓をたたきながらついて行きます。

こうして沢山のお菓子たちがみんな一所に輪を作ると、一二三というかけ声ともろ共に一時に踊り出しました。

「プーカプーカ、チョコレート

プーカプーカ、ローリング

ミンツ、ワツフル、キヤラメル、ウエファース

ドーナツ、スポンジ、ボンボン

太鼓の響はボンボン

ピアノのひびきがローリング

ウエファースと歌い出す

ドロップドロップ踊り出す

ワツフルワツフルはやし立て  
キャラメルキャラメル笑い出す  
足どりおかしくチョコレート

スポンジスポンジ飛び上る  
そこで五郎さんのポンポンが  
ミンツミンツ痛み出す」

五郎さんはもう死ぬ位苦しくなって、

「苦しい苦しい、堪忍して頂戴。助けて助けて、お父様！ お母様」  
と叫びました。

「まあ、どうしたの五郎さん。大層うなされて」

とお母さんにゆり起されて、五郎さんはフツと眼を開くと、まだおひる過ぎでうちの中  
はあかるいのです。

「お母さん、僕のお腹の中でお菓子が踊っている。ああ、苦しい苦しい。堪忍して頂戴、  
もう決してお菓子を食えませんから。アー、イタイ、イタイ。お母さん、助けて助けて」  
と、五郎さんは汗をビッシヨリ掻いて、のた打ちまわりました。

お母様は驚いて、お医者を呼びにお出でになりましたが、いろいろわけを尋ねて、やっ  
とお菓子の食べすぎだという事がわかりますと、お医者はこのわい顔をして、

「これから決してお菓子を食えてはいけませんよ」

と云って、苦い苦いお薬を置いておいでになりました。

それから五郎さんは、病気が治ってからも決してお菓子を欲しがりませんでした。